

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について（宇都宮）

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について

——智積院蔵『上新請来経等目録』を手懸かりとして——

宇 都 宮 啓 吾

一 はじめに

稿者は、現在、智積院御当局よりご高配を賜って智積院新文庫聖教の調査・研究を進めており、その概要を智山教学大会講演に基づく稿を始めとしていくつかを公にしたが、⁽¹⁾それ以降には、本誌において報告を行なっていないため、現状報告と小見を公にすることを目的として、成稿したことを始めに申し上げる次第である。

各時代・各地域における拠点の寺院の教学の実態については、人の動き（師資相承・教学的活動等）や総体としての聖教の形成や移動、また、各聖教の書写・伝持やその記述等、様々な視点からの分析が行なわれ、大きな成果が挙げられている。

そのような成果は、一つには聖教調査に基づいてなされたものであり、諸所における聖教調査の重要性が改めて認識されるところでもある。

稿者も、智積院新文庫聖教の悉皆調査を進めており、例えば、従来は、その重要性が説かれながらも資料の制約によって「謎」と言っても過言ではなかった、⁽²⁾中世律宗の拠点の寺院であった泉州家原寺の聖教群が含まれていることを確認し、以下の如きことを指摘した。⁽³⁾

■智積院新文庫においては、十五世紀後半頃の弘源・亮盛・弘賢らによって集積された和泉国家原寺満蔵院の聖教群や成覚寺成純らの聖教群が一つの核として存在する。

■弘源(泉州極楽寺地蔵院)・亮盛(泉州家原寺満蔵院)・弘賢(同)は和泉国と根来寺を中心に活動。また、和泉国においては家原寺を中心とした大鳥郡一帯を拠点としている。

■三者は三宝院流の法系にあり、東寺宝厳院・学頭法印宝清―同院・清聖を継ぐ、弘源―亮盛―弘賢という関係にある。

■亮盛は、寛正五年(一四六四)誕生、享祿二年(一五二九)以前死去。

■弘賢は、寛正三年(一四六二)誕生。

■和泉国家原寺は、行基誕生の地として知られるとともに、叡尊が別授戒を初めて授けた中世律宗系の拠点として知られている。

■和泉国家原寺満蔵院亮盛は根来寺初代能化道瑜の資である和泉国大鳥郡成覚寺の成純と交流。亮盛も文亀二年には根来寺十輪院に住して修学していたことが知られる。この点から、亮盛と道瑜との関係も窺われる。また、亮盛は、根来寺中性院聖教目録を所持するなど、亮盛の修学環境の高さも窺われ、そういった「質の高い」根来寺教学が和泉国家原寺を中心に伝えられていることが知られる。そして、これらの資料から和泉国における根来寺教学の実態が窺われる点も興味深い。

■このような点から、和泉国においては、その教学的拠点として極楽寺地蔵院、家原寺満蔵院・成覚寺等の大鳥郡周辺の寺院が挙げられ、それらが和泉国の安国寺と考えられる家原寺を中心として、根来寺・高野山との関わりが存した。

また、智積院聖教の価値として、非常に重要なものとしては、智積院が京都東山以前にあった根来寺の教学的実態の解明が可能となったことである。根来寺は、その紹介として常に引用されるルイス・フロイス『日本史』の「都の大学

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について（宇都宮）

の外に五つの有名な大学がある。高野、根来寺、比叡山、近江、坂東。」の一つとされながらも、豊臣秀吉の侵攻によって壊滅的な状況に陥り、その実態については断片的な資料によって窺い知るしか無いのが実情であったが、智積院聖教には、前掲の家原寺聖教の他に、根来寺聖教に基づく書写、即ち、教学的活動の成果が数多く伝持されており、今後の解明が大きく期待される場所である。

そして、稿者自身もその解明の一つとして、根来寺聖教の地方への移動に伴う教学上の伝播の問題や、地方から根来寺へともたらされた聖教群がそのまま、または書写本として別の地域へと移動するといった、教学上の拠点の寺院が単なる発信としての役割を超えて「接続点」としての役割をも担っていることを指摘した。

この根来寺における「接続点」としての視点は、幸いにして受け入れられたらしく、文学の側においても、『孝養集』の書写を巡る問題を検討した高橋秀城氏の分析、歴史学の側においても、地点を変えて房州宝珠院の聖教に基づく類似の報告をした三好英樹氏の指摘などでもこの用語が用いられており、聖教の形成における教学的拠点の問題は、今後とも進められるべき課題と認識している。

但し、智山年表編纂室によって完成された『真言宗智山派所属寺院聖教・史料撮影目録』（真言宗智山派宗務庁編 二〇〇七・三）から地方における聖教の奥書が確認し得る状況に至り、それらや聖教調査の成果を統合的に活用することで、聖教の移動や書写、また、「接続点」としての機能を有する根来寺の教学の実態は、孰れの地域においても確認できるものと予想されるところであり、単に地域や文献を変えて実態を指摘することに留まることなく、そこにどのような意味があるのかを様々な視点から解明していくことが今後の課題になるものと思われる。

また、このような問題意識に立った時、智積院新文庫における聖教は、まさに「学山」の書庫に相応しい質・量を備えており、右の如き根来寺の問題だけでなく、個別の聖教を詳細に検討することで、各時代の諸処の教学的拠点の解明にも資するものと期待される。

そこで、本稿では、智積院新文庫に所蔵される『御将来目録』を手がかりとして、聖教、特に、稿者の主たる専門と

する訓点資料の分析から見た教学的拠点の問題について考えてみたい。

二 問題の所在

教学的拠点における寺院活動の問題を検討する場合、日本語研究の一分野である訓点語学においては、ヲコト点を手懸かりとした分析が行なわれている。

ヲコト点とは、漢文を訓読する際に、形（一／十―など）と位置（漢字一字を□と見た時、その左下・左中・左上・中央など）によって頻出する助詞や助動詞、活用語尾などの文字（仮名）の代用として表記に用いたもので、このヲコト点の形式（付け方のルール）はそれぞれの宗派や流派によって異なっており（例えば、「円堂点」と称されるヲコト点の形式は仁和寺所用）、ヲコト点の形式を知ることが出来れば、当該訓点資料の素性、訓点を付けた人物がどの宗派、流派に属していたか等を知ることができる。

この成果を踏まえて、悉皆調査に基づき、石山寺や高山寺における教学の実態解明や各寺院の聖教に施されたヲコト点の実態を明らかにし、更には、当時の諸寺院における学問的関心の問題を分析した諸氏の研究も多く存する。

このような知見は、訓点語学だけの知識とするべきものではなく、むしろ、書誌学的知識^⑥として書籍を扱う者全てで共有するべきものと思われる。

それは、經典等の典籍類に訓点を施すこと自体が僧侶による修学・教学の営みの成果であり、訓点資料は、教学の実態を示す「物的証拠」とも言い得るものだからである。

例えば、仁和寺所用の円堂点は、智積院新文庫聖教においても、以下の資料の如く、頼瑜僧正の使用が確認され、それらの分析・解明も重要になるものと思われる。

○公家御修法次第^{仁和寺}（四五函一 号二番） 弘長二年写 朱点（円堂点）

〔弘長二年四月七日於伏見速成院以仁／和寺本書写畢是則爲紹隆仏法廻向菩提而已〕
 〔朱〕「同日交点了」
 金剛仏子頼瑜

○伝法灌頂三昧耶戒作法（四五函一三番） 文応元年頃写 朱点（円堂点）

〔本記云／仁平三年六月十五日於密嚴院西谷傳授始之同十六日傳授了／文應元年七月十六日於西小田原坊以禅〕
 〔文應元年七月廿日辰時於禅定院奉傳授了／豪信三十二〕

例えば、右の『公家御修法次第^{仁和寺}』の奥書に見える「伏見速成院」は、「伏見即成院」のことと考えられ、橘俊綱開基で、「迎接之体」という来迎迎接の寺院として浄土教や戒律の問題と関わり、また、後白河院皇女宣陽門院との関わりや、近年では那須与一との関わりとしても注目される寺院である。その一方で、東寺に『律宗三大部』を施入するなど、真言に厚く帰依した宣陽門院がこの伏見即成院を自らの墓所を定めたことについては「不可解」とされるなど、即成院と真言宗との関わりについては未だ手つかずの問題と言える。

そのような寺院において、新義真言宗の大成者とされる頼瑜が仁和寺に関わる聖教の書写と仁和寺所用の円堂点を加点していることには注目できる。

是くの如く、ヲコト点と奥書とを組み合わせ分析することによって、仏教史学の点でも諸種の知見が得られるものと期待されるが、合わせて、ヲコト点自体に注目しても、例えば、円堂点の意義やその成立の背景について明らかにすることは、種々の知見を得ることに繋がるものと思われる。「円堂点の整備が、新しく始まった学統、仁和寺広沢流の確立と、それに併行する教育の改善が然らしめた」との三保忠夫氏の指摘は、まさに、その一つと言える。

このような円堂点の問題を考える上で、新文庫に所蔵される『上新請来経等目録』は、非常に重要な資料的価値を有するものと思われる、稿者は、前稿⁹⁾において若干の紹介を行なったが、本稿では、前述の如き教学的な問題をも視野に入

れて、円堂点の高野山伝播や教学の実態等に関する新たな知見を加えつつ、改めて検討し直してみたい。

三 智積院新文庫蔵『上新請来経等目録』の書誌的事項

『上新請来経等目録』(五函二〇号)は、一般に「御請来目録」と称され、弘法大師空海(七七四～八三五)が唐から持ち帰った經典・曼陀羅・仏具等の目録であり、上表文及び巻末に大同元年(八〇六)十月二十二日の記載のあることから、成立はこの頃と考えられる。

本書は、縦二五・四cm、横一五・六cmの粘葉装(料紙は楮紙打紙)で、次に示す奥書の如く、平安後期、延久元年(一〇六九)の書写になる。

(一〇六九)
「延久元年十一月十六日於北御室書了 小僧延誓」

(朱)「同年於高野新房読点了」

(表紙外題下)「蓮林房」

右の奥書から、本書は延久元年(一〇六九)北御室において延誓が書写し、同年高野山の新房において加点されたものであることが知られる。

本書に施された訓点については、朱墨の二種が存し、朱点については、奥書に記される通り、平安後期延久元年加点のヲコト点(円堂点)・仮名点(訓・音)・声点(圈点)・合符(訓・音)、並びに、仮名の右肩に単点を付すことによつて濁点を示す例(「吵べ・焉サ」の「べ」が存する。また、墨点については、院政期から鎌倉前期頃加点で数筆が存し、仮名点(訓・音)・声点(圈点)・胡麻点)・合符(訓・音)・合点・返点等が存する。

本書の写本としては、従来、最澄書写の東寺蔵本(平安前期・国宝)と竹生島宝巖寺蔵本(平安中期写・重要文化財)、また、

草稿本として、施福寺蔵本（平安前期写）^⑩が知られているが、本書は、これらに次ぐ古写本であり、その書写も仁和寺北院において行なわれるなど、善本として認められる。

これらの点を踏まえて、以下、本書を手懸かりとした高野山の教学的伝播の問題について検討して行きたい。

四 円堂点の高野山伝播

まず、本書が加點された当時の高野山の状況について確認しておきたい。

仁和寺、特に広沢流を中心に使用される円堂点が高野山に伝播している点については、従来より指摘されているところであり、その最古の例として、築島裕氏は次の石山寺蔵『八字文殊儀軌』を挙げている。^⑪

○八字文殊儀軌 石山寺（校倉一八函一五号） 文応元年頃写

褐點・墨點・朱點

（奥書）^{（一〇六八）}「治曆四九月五日於池御房書了」

（別筆一）^{（一〇六九）}「治曆五年三月廿五日」

（別筆二）^{（一〇七七）}「承保四年正月十一日受了／傳受師南岳入寺云々／求法小僧（草名、延カ）之本也」

（朱書）^{（一〇七九）}「承曆三季四月十八日／於金剛峯寺受法了」

築島氏は、右の奥書に見える「池御房」を仁和寺大御室性信の資である長信（一〇一四～一〇七二）、「南岳入寺」を南岳房濟暹（一〇二五～一一一五）であるとし、承保の加點は濟暹の弟子によるものとしている。そして、承曆三年（一〇七九）朱書奥書の「於金剛峯寺受法了」の記事を以て、円堂点資料の高野山伝播を確認できる最古の資料と認定している。

智積院蔵『上新請来経等目録』は、奥書に記されるように、右書を遡る延久元年（一〇六九）の加點であり、本書が円

堂点の高野山伝播を示す最古の資料と考えることができる。

右の『八字文殊儀軌』については、奥書に済暹の名が見え、この済暹については、月本雅幸氏によって、空海撰述書の円堂点加點資料の祖点の創始者である可能性が示唆¹²されており、特に、この承暦三年（一〇七九）は済暹が『統遍照発揮性靈集補闕鈔』を編纂した年（十一月）にもあたり、そういった当時の碩学である済暹教学の高野山伝播という側面から考える可能性も存し、また、智積院蔵『上新請来経等目錄』の加點も空海撰述書である点からすれば、右の如き可能性も考えられる。但し、本書の奥書には済暹の名は無いため、別の視点からも考える必要が存する。

本書の奥書にある「北御室」は、本書のヲコト点が仁和寺所用の円堂点であることから仁和寺北院のことと考えられ、この北院として注意すべきことは、三条天皇の皇子・師明親王（一〇〇五―一〇八五）が同院で済信を戒師として出家して性信親王となり、後に、仁和寺大御室と称されるようになったことである。

この大御室性信と高野山との関わりについては、次の梅尾祥雲氏の指摘¹³が存する。

三條天皇の長和五年（二六七六（皇紀…稿者注））、祈親上人定誉が高野山に来住して、一山の復興に腐心し、御室仁和寺性信親王の入室たる行明検校、その後を襲ふて一山を統轄した。この行明の時、その恩師たる性信親王親しく高野山に登御し、庵室を奥院御廟橋の川北に構へて参籠し給ひ、その年即ち延久四年の暮れ、小野の成尊僧都に師事せる明算上人も学成りて高野山に帰還し、中院即ち龍光院に止住してその教学を宣揚し、此所に高野山教学が再興の第一歩を踏み出すことになったのである。

この明算上人と時を等うして、高野山には南院に維範大徳ありて子嶋南院方の祖となり、往生院谷の草庵には性信親王の法資にして観音院流の祖たる寛意僧都が在住して、各々その教線を張つたのであるけれども、後世にまで超人的の感化を及ぼし、高野山教学の苗圃となつたものは何と云つても中院の明算上人である。

右の指摘の如く、当時の高野山は、大御室性信の入室である行明が高野山を統括し、また、性信自身も高野山に登御しており、このような状況下において本書が仁和寺から高野山に移動して加點されるといふ、まさに円堂点の高野山伝播を明確に示した資料であることが知られる。

つまり、高野山における仁和寺広沢流所用の円堂点の伝播の背景を、大御室性信による高野山の統括という側面から⁽¹⁴⁾考えることが確認でき、また、本書や石山寺蔵『八字文殊儀軌』⁽¹⁵⁾、更には、観音院寛意の高野山における活動を見る時、高野山における仁和寺教学、特に、円堂点資料という具体的資料から確認できる仁和寺教学の伝播は、大御室性信による高野山の統括の中で、その弟子達の活動に基づくものであることが窺われる。

更に、ヲコト点展開史上の問題として、合わせて、観音院僧都寛意の問題についても述べてみたい。

本書には、一例ながら、複星点「・」を「スルコト」とした例が存する。円堂点における複星点については、点図集の円堂点の最後の壺に「観音院僧都被加¹⁶点」とあることから、この複星点の創始者を中田祝夫氏は延寿(九九二—一〇四九)とされ、一方、築島氏は、複星点の最古の例が次に挙げる東寺金剛藏『佛母大孔雀明王儀軌』であることから、延寿存命時には複星点の存在が確認できないことをもって、「観音院僧都」を寛意に宛てることを提言された。

○佛母大孔雀明王儀軌 東寺金剛藏(三八函一) 永保二年頃写 朱點

(朱書)永保二年二月廿八奉受了／大師御室／
□□□□□□□□□□□□□□□□／求法沙門□□□□□□

(朱書二)「永保二年三月二日奉受了
御室御傳／梵字慈河廣大(yu he he va)」

〔一二七〕永久五年十一月廿五日於池上塔下僧正御房／奉受了」

尚、本書、新文庫蔵『上新請来経等目録』の複星点は、従来最古とされた永保二年（一〇八二）を遡る延久元年（一〇六九）であり、ここでも、本書の訓点資料としての価値の高さが窺われる。但し、築島氏の指摘の如く、観音院僧都を延

寿にまで遡ることはできず、やはり、寛意に宛てることが相応しいものと思われる。

また、寛意は高野山において観音院を創始する学匠とは言え、当時は、高野山棲居以前のことであり、更に、東寺金剛藏『佛母大孔雀明王儀軌』の奥書も、判読困難ながら、大御室性信との関係を窺わせ、此書にせよ、本書にせよ、初期の複星点の資料は未だ複星点九種が全て完備されるような体裁ではなく、また、直接的に寛意との関係を窺わせるものとはなっていないことが確認できる。このことから考えれば、この複星点自体も、寛意創始とするよりは、大御室性信周辺で創始され、観音院僧都寛意によって整理完備されたものと理解するほうが相応しいものと思われ、円堂点の展開の実態が窺われる点にも注目できる。

以上のことを確認した上で、更に、本資料を手懸かりとした高野山の教学的側面について、具体的資料を踏まえて検討して行くこととしたい。

五 濁音表示を巡る問題

ここでは、当時の高野山に於ける仁和寺・円堂点と諸流派との交流を巡る問題を検討した上で、本書のヲコト点展開史上における位置について述べることとしたい。そのため、本資料の濁音表示を巡る問題に注目する。

初めに述べた如く、延久元年加點である朱点には、濁音表示として仮名の右肩に付す形式「𪛗𪛗」の「𪛗」が用いられている。そこで、本書にこの濁音表示形式が用いられている意義について、以下に検討していく。

五・一 高野山における諸流派の交流

この濁音表示形式については、沼本克明氏によって、次の如く、早い時期においては専ら南都古宗と真言宗とにおいて使用されていることが指摘されている。¹⁷⁾

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について（宇都宮）

使用されているヲコト点は、早い頃は仁都波迦点（天台宗山門派）、天爾波留点（別流）（天台宗山門派）の天台宗でも使用されているが、大部分は喜多院点（南都法相宗使用）、中院僧正点（高野山真言宗使用）、円堂点（仁和寺真言宗使用）の他に東大寺点（南都三論宗・真言宗使用）のものも有るから、この方式は、専ら南都古宗と真言宗とに使用されるようになったと考えられる。

そして、沼本氏は、この濁音表示形式の早い例を整理され、この濁点表示形式を使用した円堂点資料の最古の例として、次の高野山光明院蔵『蘇悉地羯羅經』承保元年（一〇七四）点を挙げているが、本書はそれを遡る例として注目できる。

○蘇悉地羯羅經 三卷 高野山光明院 奈良写 朱點・白点

（卷上奥）（朱）「以治安三年四月十二日點了 求法沙門□□」
（一〇三三）

（卷中奥）（朱）「天仁元年九月廿一日於華藏院律師傳受了 沙門聖惠」
（一一〇八）

（卷下奥）（朱）「寛弘五年四月十八日讀了 南御室御傳法」
（一〇〇八）

（白）「承保元年十一月廿八日於高野山中院明算山籠奉受了 寛智」
（一〇七四）

（朱）「天仁元年十二月十五日於華藏院律師傳受了 沙門聖惠」

従来、右の資料については、先行研究が存し、円堂点資料としての紹介の他に、その国語学上の意義として、仮名字体や語彙の問題¹⁸、角点を巡る問題¹⁹、そして、築島氏による以下の如き加點の分類に関する研究等²¹が存する。

①白点（薄） 卷上・中・下寛弘より少し以前 長保頃 第六群点

- ②朱点(薄) 卷上・中・下 寛弘五年 第五群点
- ③朱点(暗赤色) 卷上・中・下 寛弘一治安頃 不明(假名点のみか)
- ④朱点(薄) 卷上・中 治安三年 喜多院点
- ⑤角点(細) 卷下 治安三年頃 喜多院点
- ⑥白点(太) 卷上・中・下 承保元年 円堂点
- ⑦朱点(太・粗) 卷上・中・下 天仁元年 円堂点
- ⑧墨点 卷上・中 仮名点

しかし、此書について、教会的交流の視点から説かれたものは未だ管見には入らず、この点について述べてみたい。まず、治安三年(一〇三三)点には、朱点で興福寺法相宗所用の喜多院点が施されている。そして、承保元年点は寛智(一〇四六―一一一一)による円堂点、天仁元年点は聖恵(一〇九四―一一三七)による円堂点が施されている。寛智は大御室性信の資、聖恵は仁和寺華藏院の三品法親王で寛智の資である。

これらを踏まえるならば、此書は、永保元年(一〇七四)加点で興福寺法相宗所用の喜多院点資料を、高野山中院(龍光院)において仁和寺大御室性信の資である寛智が明算より「奉受」した資料であることが知られる。

即ち、此書から興福寺法相宗・高野山中院流明算・仁和寺広沢流寛智の教会的な繋がりをみる事ができる。

この興福寺法相宗喜多院点・高野山中院流・仁和寺広沢流を巡る問題については、更に、以下の如きことにも注目できる。

前述の沼本氏は、この濁音表示形式の早い時期の資料として、天台宗系統のものを除けば、その最も早い例が喜多院点資料で、子嶋真興(九三五―一〇〇四)にきわめて近い人物の加点とされる醍醐寺蔵『法華経釈文』であり、次いで、東大寺点資料、また、真興が東大寺点を改変して創始したとされる中院僧正点の資料であり、この濁音表示形式と真興と

の関わりには注目できるところである。

特に、円堂点資料の最古の例として従来認識されてきたものは、次に挙げる清水寺蔵『縛日羅駄都私記』であり、この書写加点には真興が関与している。^{②②}

○縛日羅駄都私記 清水寺 天元五年写 朱点(円堂点)

〔天元五年^(九八二) 歲次 壬午 二月廿五日於香山寺記畢 興福寺／釋真興〕

〔件書以彼自筆削已了而其本得失遂不可／得仍借定一度上徒寫取之本更以書之／
(九八九) 永延三年 己丑 四月二日於子嶋寺寫了頗／似嗚呼而已 釋真興〕

此書の奥書から、永延三年(九八九)に真興によって書写されたことが知られ、また、その加点も、築島氏によって同じ永延の筆と見ることが指摘されており、加点自体も真興、乃至は、その周辺の人物と考えられる。この点からも、子嶋真興と円堂点との関わりについては注目できるところである。

そして、この真興が創始した中院僧正点は、明算以降、高野山所用となる。

この中院僧正点が高野山へと伝播することについて、築島氏は次の如く指摘されている。^{②③}

金剛峯寺諸院家析負輯三に収められた祈親上人傳によると、上人は子嶋真興より秘教を学び、密灌を利朝から受け、後、高野山に至つて堂舎の修復を志し、中院の整備を完成してこれを弟子明算に住持させ、自分は釈迦文院に引退したといふ。同巻の明算伝には、祈親上人は、明算をその父母から請ひ受けて弟子としたと見える。定誉の加点本は未だ管見に入らないが、このやうな因縁から、中院僧正点が伝へられた可能性もあるのではなからうか。

清水寺蔵『縛日羅駄都私記』から円堂点と子嶋流真興との関わりが具体的に確認でき、また、この真興創始の中院僧正点が高野山において祈親上人定誉を通じて伝えられたという点は、高野山における円堂点と子嶋流との関わりを予想させるものである。

また、仁和寺と子嶋流との交流を直接的に窺わせる人物としては、大御室性信の資であり、智積院蔵『上新請来経等目録』の加点当時において、高野山検校であった行明（一〇七三）にも注目できる。この点については、多和秀乗氏の次の指摘²⁴が存する。

祈親上人（持経上人）定誉が、長谷寺から高野山に登って来たのは長和五年（一〇一六）といわれているが、祈親上人の法流は子嶋流（壺坂流）に属し、『高野春秋』によれば子嶋の真興に師事したとあり、『高野興廃記』には興（福寺）行者子嶋真興の弟子仙救灌頂の末資とある。「高野山先哲灌頂記録」（正治二年）は現存する最も古い高野山の血脈であるが、この灌頂記録は大御室（性信）行明から始まるが、冒頭に行明が壺坂寺子嶋流太念の付法で、行明、良禪、行恵、灌実と続いており、祈親上人定誉が最初に高野山に居を定めた場所が大湯屋（東室）であり、この地が後に惣持院となったといわれるのは、惣持院の開基惣持房行恵、同第二代灌実が子嶋流に属することとも深い関わりがある。

右の如く、性信の資である行明が子嶋流太念付法であることは、直接的に仁和寺と子嶋流との繋がりを窺わせるところであり、また、『血脈^{中院}』によれば、中院流における明算付法の行恵も右の子嶋流の中（太念—行明—良禪—行恵）に確認できる点は、高野山における仁和寺大御室性信とその資である行明周辺の諸流派交流を窺わせるものである。

こういった形でも、高野山における諸流、仁和寺・興福寺法相宗・子嶋流・中院流等の交流が確認できる。

これらの点から考えるならば、本書、智積院蔵『上新請来経等目録』にある濁音表示形式は、右の如き諸流派の交流を背景として加点されたものであることが知られる。

五・二 高野山における浄土教を巡る問題

本書の加点（濁音表示形式の使用）が諸流派の交流に基づくものであることを踏まえた上で、この問題をも、更に、この時期における高野山浄土教の視点からも述べてみたい。

智積院蔵『上新請来経等目録』の加点時期よりは降るが、明算周辺における問題として、従来知られる最古の「念仏宗僧」との記述が次の天野山金剛寺一切経蔵『無量清浄平等覚経』巻下の奥書に見える。

○無量清浄平等覚経 金剛寺 保延五年写

〔一三五〕
「保延五年九月二日巳時奉書」 念仏宗僧運覚

「願以書写功 必為往生因 普法界衆生 生西方淨刹」

右の運覚は明算の「親昵之弟子」（『僧運覚注進状』大治四年二月九日条）であり、稿者は、これを手懸かりに、当時の高野山中院流において浄土教と関わる側面の存したことを指摘したことがあり、また、高野山における浄土教の問題としては、従来より、その名の知られる経源や教懐らの活躍した小田原別所の関与していることが井上光貞氏によって指摘され、また、小田原はヲコト点伝播の問題としても注目されている。²⁶ 築島氏は、興福寺法相宗所用の喜多院点が高野山へと伝播する原動力として、「中川成身院・仁和寺・小田原山寺で喜多院点が盛んに行なわれ、多分、小田原別所を通じて、高野山にも広まったものと思われる」²⁷と述べられている。²⁸

この点について、中田氏が以下の真福寺蔵『妙法蓮華経優婆提舍』（喜多院点）の奥書を紹介し、²⁹

○妙法蓮華経優婆提舍 真福寺 治暦四年頃写 朱点（喜多院点）

〔一〇六八〕
「治暦四年戊申二月廿六日未剋小田原山寺迎接房移点已畢」

仮名比丘経源

ここに見える「迎接房経源」^{③〇}を『後拾遺往生伝』巻中にある経源上人(板本では「経暹」として、以下の如く引用している。

上人経源「板本「暹」者。中納言定頼卿之息也。壮年之時。出俗入真。初則住興福寺。窺法相之義淵。後則遷小田原。汲真言之定水。念仏多年。行業幾日。偏修往生業。故号迎接房。

これらの記述から、経源が始めて興福寺で学び、後に南山城小田原に住した後、高野山に籠居したことが知られる。そして、真福寺蔵『妙法蓮華経優婆提舍』が喜多院点であることは、この迎接房経源の出自に基づくものであることが知られ、喜多院点が高野山へと伝播する背景をも窺うことができる。

高野山の復興に尽力した祈親上人定誉が興福寺系である一方で子嶋流を受け、また、高野山検校で性信の資である行明も子嶋流をも受けており、行明の次に高野山検校となった維範も子嶋流南院方の祖であるなど、孰れも興福寺系の流れを受けており、ここに興福寺の別所的存在であった小田原との繋がりが窺われ、このような背景のもとに、経源ら法華経持者や浄土教家が高野山との関わりを深めていったことが知られる。^{③1}そして、この点が高野山における興福寺法相宗所用であった喜多院点の伝播に大きく影響しているものと考えられる。

また、この小田原と真興の子嶋流や高野山中院流と関わる資料としては、次の『大威徳念誦次第』にも注目できる。

○大威徳念誦次第 石山寺(校倉聖教二六函四七号) 承暦二年写 朱点(喜多院点)・墨点

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について（宇都宮）

（奥書）承暦二年^{（一〇七八）}戊午三月十九日於^{（墨消）}□□□□房^{（ママ）}書写畢／小田山^{（ママ）}寺西室聖御房御也／求法^{（擦消）}（草名）之本也

（別筆一）「信曉之本也（草名）之」

（別筆二）「（草名）之」

右の奥書に見える「小田山^{（ママ）}寺西室聖御房」について、築島氏は教懐のことを指すものとされ、「信曉」については未詳とされたが、この信曉について検討するならば、『血脈^{中院}』の中に、宗恵付法の弟子（明算―行恵―宗恵―信曉）としてその名が見え、小田原聖教懐の関与する喜多院点資料が実際に高野山中院流と繋がるということが確認できる。また、前述の如く、宗恵の師である行恵も子嶋流太念の流れを受ける人物である。

尚、喜多院点が高野山に伝播した例としては、次の大東急記念文庫蔵『弁顯密二教論』にも注目できる。

○弁顯密二教論 大東急記念文庫 天喜五年頃写 朱点（喜多院点）

（一〇五七）
「天喜五年十二月廿一日奉畢／願以此善根二利大願成自他共証菩提」

（追筆）「同月同日点畢」^{（ママ）}「沙門長^{（ママ）} 長胤」

（表紙）「釈沙門性寛」「釈真誉本」

此書の長胤・性寛については未詳ながら、真誉は高野山持明院流の祖であり、また、明算―良禪―真誉という流れにあり、喜多院点資料が「釈真誉本」として高野山に伝わったことが確認できる。また、真誉は仁和寺寛助の付法でもある。

以上の資料から考えるならば、高野山においては、明算の出自と関わって祈親上人定誉を介した興福寺法相宗所用の喜多院点や真興の流れである子嶋流の中院僧正点を受容した側面の他に、浄土教の伝播に伴って小田原別所で使用され

た喜多院点や真興の流れを受容する側面をも有していたことが知られる。また、それらが『大東急記念文庫蔵』『弁顯密二教論』や行明のように、仁和寺とも繋がっていることが知られる。

そして、前掲の梅尾氏の指摘にもあつた明算の高野山における位置を考え、また、今まで検討して来た資料が中院流へと繋がっていくことから考えるならば、高野山における諸流派の交流の拠点として、もしくは、諸流の窓口として、この中院流や中院(龍光院)が一つの拠点となっていたであろうことが知られ、諸種のヲコト点伝播を始めたとしたヲコト点展開史上における高野山中院流の位置をも確認できる。

つまり、本書における濁音表示形式の使用は、諸宗交流の実態、特に興福寺法相宗と高野山・仁和寺との交流を窺わせるのみならず、本書の奥書には明示されていないものの、高野山における数学的拠点としての中院流の位置付け、特に仁和寺と中院流との繋がりをも示す可能性が指摘できる。

五・三 ヲコト点展開史における智積院蔵『上新請来経等目録』の位置付け

以上の如く、当時の高野山における諸流派の交流の実態を、ヲコト点の伝播という側面から検討し、仁和寺(円堂点)と興福寺(喜多院点)、真興子嶋流(喜多院点・中院僧正点)・明算中院流(中院僧正点)らとの間に複層的な諸流交流の存することを示した。そして、高野山に諸流派のヲコト点が複数のルートから伝播しつつも、それらが高野山中院流へと繋がっていく、即ち、高野山における中院(龍光院)の教学的な位置についても具体的に示してきた。

ここから、智積院蔵『上新請来経等目録』の加点の実態、即ち、仁和寺所用の円堂点が高野山において加点され、更に、興福寺法相宗系統の喜多院点資料に見られる濁音表示形式が使用されている点は、右の如き高野山における諸流派の交流を反映したものと考えられ、本書のヲコト点展開史上の位置付けも明確になる。

六 おわりに

以上、本書を手懸かりとして分析することによって、高野山における諸宗交流の実態を具体的な資料に基づいて記述することができ、また、これらを背景とした円堂点の実態や高野山におけるヲコト点展開の実態をも見ることができたものと思われる。

訓点資料が僧侶の教学・修学活動の営為の成果であることからすれば、訓点資料は単なる語学資料として捉えるべきものではなく、本邦典籍史や仏教史学の資料としても積極的に用いるべきものと思われ、本稿の如き分析は今後とも進められるべき課題と認識している。今後とも更に検討を進めて行きたく、諸賢のご叱正を仰ぐ次第である。

注

- (1) 平成二十二年度智山勸学会教学大会における講演(二〇一〇・五)とその講演記録「智積院における聖教の継承と集積」『智山学報』六〇 二〇一一・三)、また、拙稿「智積院新文庫の聖教について」(科研・基盤研究(B)「智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究」(課題番号:20320067)報告書(二〇一一・三)で述べた。また、これらに加筆・修正の上で成稿した論考(前記講演記録の成稿化として智山勸学会より刊行)も以下の如く、公にした。
○拙稿「智積院新文庫の聖教について」『近世の仏教』青史出版 二〇一一・七)
- (2) 追塩千尋「古代・中世の家原寺について」『北海学園大学人文論集』四二 二〇〇九・三)
- (3) 拙稿「訓点資料から見た智積院新文庫聖教の一側面」『訓点語と訓点資料』一二八 二〇一二・三)
- (4) 高橋秀城「信仰曼荼羅―仏教と文学―」『仏教文学』第三六・三七合併号 二〇一二・四)
- (5) 三好英樹「中世後期における根来寺と地方寺院―宝珠院聖教にみえる安房国・下総国の寺僧を中心として―」(平成二十四年度智山教学大会発表 二〇一二・五)
- (6) 科研・基盤研究(B)「智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究」報告書

- (7) 瀬田勝哉「伏見即成院の中世―歴史と縁起―」(『武蔵大学人文学会雑誌』三六 二〇〇五・三)
- (8) 三保忠夫「乙点図から円堂点へ」(『国文学攷』六九 昭五〇・一〇)
- (9) 拙稿「訓点資料から見た智積院新文庫聖教の一側面」(『訓点語と訓点資料』第一二八輯 二〇一二・三)
- (10) 『墨美』二八六号「新出・空海書請来上表」施福寺蔵(一九七八 墨美社)
- (11) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(一九九六 汲古書院)
- (12) 月本雅幸「高山寺蔵本文鏡秘府論長寛点」(『高山寺典籍文書の研究』・「空海撰述書の古訓点について―その性格と研究の構想―」(『訓点語と訓点資料』77輯)・『六地藏善本叢刊 第七卷 文鏡秘府論』解題(一九八四 汲古書院)
- (13) 梅尾祥雲「高野山教学史一斑」(『密教研究』六〇 一九三六・九)
- (14) この点では、済暹教学も性信との関わりの中で見るのが重要であろう。
- (15) 済暹教学の高野山伝播に性信が関わっていることは、堀内規之『済暹教学の研究―院政期真言密教の諸問題―』(二〇〇九 ノンブル社)で次の如く指摘されている。
 済暹が、空海の『遍照發揮性靈集』の巻八・九・十の散逸を歎き、『続遍照發揮性靈集補闕鈔』を編じることができたこと、さらには空海の著作目録を済暹は『弘法大師御作書目録』として編じていること等は、まさに御室の後ろ盾があったればこそであろう。
 その意味では、円堂点の高野山伝播は、広く、この性信の問題から考えることができるものと思われる。
- (16) 中田祝夫『古点本の国語学的研究 総論篇』(一九五一 改訂 一九七九 勉誠社)
- (17) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(二〇〇九 汲古書院)
- (18) 中田祝夫『古点本の国語学的研究』
- (19) 曾田文雄「訓点語彙―光明院蔵蘇悉地羯羅經承保元年点」(『訓点語と訓点資料』第八輯 一九五六・九)
- (20) 小林芳規『角筆文献の国語学的研究』(一九八七 汲古書院)
- (21) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』
- (22) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』

教学的交流から見た院政期高野山のヲコト点伝播について（宇都宮）

- (23) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』
- (24) 多和秀乗「高野山教団と紀州出身者―特に明算上人を中心として―」(『密教大系 第六巻 日本密教Ⅲ』一九九五 法蔵館)
- (25) 拙稿「院政期訓点資料研究の一問題―真言宗における教学的交流を巡って―」(『日本語の研究』四・一 二〇〇八・一)
- (26) 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』(一九五六 山川出版社)
- (27) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』
拙稿「光明山における諸宗交流の一側面―経雅の訓点本を手懸かりとして―」(『頼富本宏博士還暦記念論文集 マンダラの諸相と文化』二〇〇五・一二 法蔵館)
- (28) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』
- (29) 中田祝夫『古点本の国語学的研究 総論篇』
- (30) 築島氏は「小田原迎接房」が、『高野山往生伝』では教懐のこととして記されていることを指摘されている。(築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』本文は以下の通り。
沙門教懐。京兆人也。幼日出家。住興福寺。壮年離寺。居小田原。山城国久世郡。故俗呼曰小田原迎接房聖矣。其後移住於亦高野山。已送廿余年。
- (31) 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』
- (32) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』

附記

本稿は、平成二十四年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究(B))「根来寺聖教の基礎的研究―智積院聖教を中心として―」(課題番号…23320097/代表者…宇都宮啓吾)の成果の一つである。

智積院新文庫聖教の調査・研究に際しては、真言宗智山派宗務庁・智積院御当局より、また、本研究の推進に関しては、小宮一雄師(真言宗智山派宗務宗長)・細川大憲師(真言宗智山派教学部長)・石川隆教師(智山年表編纂室主幹)・田口秀明師(智山年

表編纂室助手)より、多大なるご高配、ご厚恩を賜りましたこと、心より深謝申し上げます。

〈キーワード〉智積院聖教、教学的交流、高野山、仁和寺、興福寺、ヲコト点、円堂点、喜多院点、中院流、子嶋流、法相宗、浄土教、院政期、上新請求経等目録